

2020/01/19

## 「なぜ礼拝に集うのか」

私たちはなぜ日曜日毎に礼拝に集うのでしょうか。神様が「安息日を守り、これを聖なる日とせよ」と命じられたからでしょうか。神様に喜んでいただくためでしょうか。確かにその通りです。しかし、礼拝の真の目的は、メッセージを聞くことで、聖書を読むときの正しい物差しを身につけるためです。

私たちは日々の生活で、それぞれ聖書を読み、祈ります。ところが、生活しているうちに、少しずつ礼拝で教わった聖書の教えとズレていってしまいます。ですから、日曜日毎に集まり、メッセージを通してその物差しを確認することが必要なのです。

礼拝というのは、ちょうどオーケストラの練習のようなものです。オーケストラは、様々な楽器の人たちが集まって、指揮者に従って演奏をし、一つの曲を作り上げます。その練習とは、指揮者の曲の解釈を聞き、その解釈に自分の演奏を合わせるというものです。彼らはそれを苦痛に思うのではなく、喜んでそうします。なぜなら、そうすれば、より深い音楽性を表現できることが分かっているからです。演奏者ひとりひとりが指揮者の指示に従って自分のズレを直しながら、より深い演奏を目指しているのです。私たちの日曜日の礼拝は、このオーケストラの練習によく似ています。

オーケストラは、指揮者によって演奏が変わるため、同じ楽譜で演奏しても、楽団ごとにまったく異なる演奏になります。有名なベートーベンの「運命」の「ジャジャジャジャ〜ン♪」を、とても伸ばす指揮者もいれば、あっさり次のフレーズに行く指揮者もあり、誰ひとり同じ表現になりません。面白いことに、教会も、イエスがキリストであるという信仰の下で何を教えるかは、それぞれの教会の指導者に任されているので、一つとして同じことを教える教会はありません。聖書という楽譜と、イエス・キリストが神であるということは共通しているけれども、人間に個性があるように、教会にもそれぞれ個性があります。神様はそれを良しとされ、ひとりひとり合った教会に導いてくださるのです。ですから、それぞれが神様に導かれた教会で、指導者が示す聖書の教えを通して自分のズレを直していくことが大切です。

ちなみに、私たちの教会で教える聖書の解釈の土台にあるのは、「人は良き者だ」ということと、「罪は病気なので、神は罰を与えない。むしろそれをいやそう（赦そう）とする。」ということです。ですから、聖書を読むときには、「人は良き者であり、神は罰を与えるのではなく、人を愛しあわれむ方」という物差しで読みましょう。

「ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」

(ヘブル 10:25)

聖書は、礼拝に集まることをやめないように教えています。「かの日が近づいている」とは、私たちの「肉体の死」は日々着々と近づいている、という意味です。私たちはやがてこの地

を去って、神の国に移住します。その時が来ることをしっかりと見据えて、教会での教えを大切にし、神への信頼を増し加えていきなさいと、聖書は教えているのです。

### ■なぜ教会の教えに従うことが必要か

私は小学3年生の時、初めて学校の授業で「習字」を習いました。ところが、初めての習字はまったくうまく書けず、ようやく書いた一枚は、半紙が墨で破れ、ひどい仕上がりで、私は絶望的な気持ちになりました。この絶望的な気持ちをなんとか克服したくて、私は親に無理を言って習字を習わせてもらいました。私を教えてくれた近所のおばあさん先生は、筆の持ち方、力の入れ方、お手本を見ること、お手本をまねることを何年もかけて教えてください、やがて、時には自分でも「これは良いできだ」と思う字が書けるようにもなりました。ところが、それでも先生は私の癖を指摘し、直すのです。その時は、どうしてここを直されるのだろうとよく理解できないのですが、先生に言われたとおりに直していくと、確かに自分の変な癖が直り、バランスの取れた美しい字になります。そんなことを毎週繰り返し、少しずつ上達していきました。

信仰も同じことが言えます。私たちが指導者に従うのは、自分が成長するためです。自分には不足がある、上手になりたいと思うなら、人は必死になってその道のプロの指導に従います。信仰においても、「重荷を下ろしたい」「平安が欲しい」と本気で願うなら、指導者の教えに従うのです。時には、自分の考えと合わないと思うことがあるかもしれませんが、そういう自分の感覚とのズレが発見できたら、それこそが成長への道になります。しかし、もし自分と指導者の考えが合わないと思った時、自分を見つめるのではなく、指導者が悪いのだと批判してしまうと、神への信頼は増し加わっていきません。教会での教えに耳を傾けない「自己流」の信仰では、それ以上の成長は望めません。

「あなたがたは、信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また吟味しなさい。それとも、あなたがたのうちにはイエス・キリストがおられることを、自分で認めないのですか——あなたがたがそれに不適格であれば別です。——」

(Ⅱコリント 13:5)

コリントの教会の人たちは、牧師であるパウロが教えたことより、自分たちの考えの方が正しいと言って批判していました。そういう人々に対してパウロは手紙を書き、最後に「あなたがたは信仰に立っているか自分自身をためし、また吟味しなさい」とまとめました。「他の人のことを試して、吟味しなさい」と言ったものではありません。教えられたことが正しいとか正しくないとか批判するのではなく、「教えられたことを通して自分自身と神様の関係を見つめなさい」と言ったのです。「あなたがたがそれに不適格であれば別です」というのは、「あなたがたは不適格ではないでしょう」という確認です。あなたがたの中にはちゃんとイエス様がおられるのだから、そのことを思い出して、自分はイエス・キリストの関係において平安を得ることを目指しているということを見つめてほしい、そうすれば、牧師であるパウロを認めることもできるでしょう、という話がここではなされているのです。

## ■自分をどのように吟味するか

### 1. 神様と自分の関係を築いているか

神様は、人と1対1での交わりを望んでおられます。神様は、すべての人と個別に交わり、信頼関係を築きたいのです。ですから私たちは、神様に直接祈り、直接御言葉がもらえるようになっています。不安は、自分で祈って神様に心に向け、自分で神様から御言葉をもたらすことで、解消されていくようになっているのです。神様は自分の代わりに誰か代理を立てて、誰かに御言葉を託すということはありません。「神様が何とやっているか聞いてください」と人に頼むことはできないし、たとえそんなことをしても、神様とその人の間には何の信頼関係も生まれません。それはただ人により頼んでいるだけで、神様により頼んでいるとは言わないのです。

もし誰かが、「神様はあの人にはこの御言葉を示していますよ」「あなたにはこの御言葉を示していますよ」というような聖書の読み方をしているなら、それは、せっかく神様が人を救って、個別の交わりができるようにして下さったことを邪魔する行為になってしまいます。本人が神様に向き合わなければ神との関係を築くことはできず、あなたが関与することはできないのです。これが神様と自分の関係を築いていく上での原則です。確かに他の人が語ることばに励まされることもあります、それが神様と自分の関係を築く基本なのではありません。

私たちが神様に祈るのは、自分の中にどうにもできない不安があるからです。「不安」とは、神様を信頼できない心の状態のことです。逆に「平安」とは、神様を信頼できる心の状態のことです。神様を信頼できる心の状態を手に入れるには、自分で神様に心を開いて祈り、神様に受けとめられた経験をするしかありません。

### 2. 「助けてください」と祈れるか

問題にぶつかった時、まず自分の力で解決しようとするのではなく、まずは神様に「助けてください」と祈ることが大切です。心からそのように祈ることができるならば、あなたの心は正しい方向に向かっており、ズレていません。しかし、問題は、そう祈れないときです。素直に、神様に助けを求められないとき、私たちは自分を吟味する必要があります。それは、どのような心情なのでしょう。

実は、「助けてください」というのは、簡単なようでとても難しい祈りです。なぜなら、人は問題にぶつかると、必ず何かのせいにしてしまうからです。無意識に自分を被害者にして、自分はこんな被害に遭ったかわいそうな者だという立場を取り、自分で自分をあわれみ、誰かから同情されることで慰めを得て、それを心の糧にしようとしてしまいます。それは、自分に被害を与えた誰かをさばき、許さないままである心の状態とも言えます。これは誰にとっても大変苦しい状態です。ですから、一刻も早く「神様、助けてください」と祈って、被害者の立場をやめればいいのですが、私たちの心はなかなかそこから抜け出そうとしないのです。なぜなら、もしその状態から抜け出してしまったら、自分が被害者であることを誰からも慰めてもらえなくなるからです。神様に「助けてください」と祈って解決してしまったら、自分がどんなにつらい思いをしたのか、誰にもわかってもらえません。そのことが惜し

まれるので、人は被害者の立場に留まり続けるのです。こういう思いを、聖書は「肉の思い」と呼びます。肉の思いは、神様に頼ることに反抗して、素直に「助けてください」と言えなくしてしまうのです。

どうすれば、被害者の立場に立つことをやめることができるでしょうか。私たちが被害者の立場を取って、人の慰めを求め、神に頼ろうとしないで肉の思いに留まってしまうのは、あなたが悪いものだからではなく、悪魔によって「死」が持ち込まれたためだと聖書は教えます。

「肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。」(ローマ 8:6-7)

「死」を持ち込んだのは「悪魔の仕業」です。人は、悪魔のせいで「被害者の立場」をとり続けようとする肉の思いに支配されてしまったのです。このことをよくご存じの神様は、悪魔の被害者である私たちに対して、まことの同情をしてくださいます。私たちは、「誰々のせいで自分はこんなに苦しい思いをしている」と思って人の同情を求めますが、人が人を憎むようにしたのは悪魔の仕業だと神様は分かっておられるので、本当の同情をしてくださるのです。

「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」

(ヘブル 4:15)

ですから、何も恐れることなく、あるがままの自分を祈りましょう。被害者の立場を取ることへの未練が捨てられない自分を、人を憎んでしまう自分を、「人からの慰めを求め、神様の同情を欲することのできない私を助けてください」と祈ればよいのです。人からの慰めを求め続けてしまうことも、被害者の立場をとり続けてしまうことも、誰かを裁いてしまうことも、神様はあなたの心のすべてを丸ごと全部受けとめてくださいます。そうやって神様に受けとめてもらえると、私たちは、神様に愛されている自分が見えてきて、自分がそれまで抱いてきた「誰かに分かって欲しい」という気持ちがバカみたいだったと気づくようになります。そして、誰かを憎み赦せない、と思ってきた気持ちすら、消えて無くなってしまっています。

自分が今日、神様に「助けてください」と言えるかどうか、毎日自分を試し、もし言えないのなら、自分の思いを吟味しましょう。しかし、吟味した結果、自分の心にズレを発見できたとしても、私たちには、その自分のズレを直すことはできません。そのズレをどうにかできるのは、神様だけです。ですから、自分の力ではどうにもできない自分をまるごと神様に「助けてください」と祈り、神様に受けとめてもらいましょう。そうやって日々自分を吟味しながら、何度も転んでは、神様の愛によって起ち上がらせてもらって、少しずつ神様への信頼を育んでいくことができるのです。